

「キリストの贖いのわざによって」（ローマ三・九～三一）

1 罪の問題

ローマの信徒への手紙に取り組んで今日で六回目です。ここまでを振り返ると、ほとんど毎回、ユダヤ人、あるいはユダヤ教徒の考え方、生き方が、何らかの意味で取り上げられてきました。実感として分かりにくいというのが、率直な感想だったかも知れません。

今日の箇所でも、まだユダヤ人のことが問題になっています。しかしパウロが見つけている先にあるのは、ユダヤ人もふくめて、すべての人に関わる問題です。そのことをまず知っておきたいと思えます。

では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです（九節）。

「わたしたちには優れた点があるのでしょうか」と、パウロは問うことから始めています。「わたしたちには」とありますから、彼はまさに一人のユダヤ人として、同じユダヤ人に問うているわけです。自問している、確かめると言ってもいいかも知れません。

その答えは、優れた点は全くない。むしろ人は皆、「罪の下にある」というものでした。まさにこの一点でユダヤ人も異邦人もない、というものでした。こうして話はずべての人間の問題へと進んで行きます。

罪という問題が、なるほどすべての人間にかかわる問題だとしても、それが、人間を考える上でもっとも重要なこと、少なくとも重要なことのひとつだと考えるのは、やはり聖書の特徴です。

ご承知のように、聖書は、天地創造、人間の創造を語り、アダムとその妻、エバのパラダイスでの生活を語り始めるわけですが、そのほとんど最初のところで、二人が神の戒めに背いたということを語ります（創世記三章）。彼らを創造した神との関わりを邪魔するもの、さらには造られた人間と人間との関わりをゆがんだものにするもの、それを聖書は罪と言っています。そしてその問題が、何らかの仕方で解決しないと、人間として、神に付与された命を、ほんとうに生き生きと生きることができないと考えているのです。

ですからパウロも、人間の救いを語るのに、人間の罪の問題から入り、それが、御子イエス・キリストによって、その十字架と復活による贖いのわざによって解決されたのだと語るわけです。

ところでこの箇所でもパウロは、たんに人間は罪を犯しているとは語らず、人は皆「罪の下（もと）にある」という言い方をしています。「罪」という、何か人格的な実体に、人は隷属している、その支配下にあるというような言い方をしています。これに

まず注意したいと思います。

個々の罪、盗むとか、嘘を言うとか、何かに違反して生じるものですが、それと罪そのもの、あるいは人間の罪性といったらいいでしょうか、人間の性質が罪に汚されているといったらいいでしょうか、この二つは、分けて考えなければなりません。これを理解するのに後に宗教改革者として立つことになったルターの修道院時代（カトリック教徒の時です）の経験の話が役に立つかも知れません。

一五〇五年、二一歳でエルフルトの町の修道院に入ることになったルター。彼は修道院規則にしたがって修行に励みます。修行とは、例えば罪のざんげです。罪を、その聞き役の司祭に告白すること（告解（こっかい））で赦免（しやめん）が与えられます。ルターのざんげは時に六時間にも及んだと言われます。

こうしたたゆまぬ努力によって青年ルターは主な罪をほぼ清算することに成功したのです。ところが、そこでルターは思わぬ困難に行き当たります。それは、たとえば六時間もかけて、神経を鋭くし、良心の声に最大の注意を払って、ざんげしたはずなのに、ざんげ室を出ると、また自分の罪が見えてくるということです。罪は隠れていて、人は知らずに罪を犯す。それに気づいたとき、ルターは「どきっとした」と有名な伝記の著者ベイントンは書いています（『我ここに立つ』）。

今日ざんげしても、明日また、別のざんげの材料が出てくる、彼は自分が罪人であることに痛切に気づいたのです。個々の、あれこれの罪ではない。それを生み出す自分が罪に汚されているということ。それは、まさにだれもが「どきっと」せざるをえない事実です。人は皆、「罪の下にある」。私どももこの事実から目を背けてはならないのです。

2 贖いのわざ

あれこれの罪なら、私どもも、ルターのように、何とか、自分の努力で、脱却することも、あるいはできるかも知れません。しかし私ども自身が罪人であることは、人はこれを自分で克服することはできないのです。罪の下にあるという状況から、丸ごと救い出される以外に、可能性は人間にないのです。

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖い（あがない）の業（わざ）を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義を告示しになるためです（二三〜二五節）。

少し難しい言葉が並んでいます。要するに、神は、御子イエス・キリストによって、人間を、罪に隷属している状況から救い出してくださいました、ということを書いています。

分かりにくい箇所ですが、イエス・キリストの十字架の意味を、パウロは二つの面から説いています。

一つは、神に背き、罪を犯した人間を、神はイエス・キリストの十字架において裁いたということです。

人は罪を犯して、罪に隷属するようになった。そこには罪があり、それを不問に付すことはできません。しかし神は人間を裁かず、御子イエス・キリストを十字架によつて裁くことにより、人間の罪を裁いたので。神は、そのようにして、自らの義を、正しさを示されたのです。

二つ目は、そのようにイエス・キリストが身代わりになって裁かれたことで、人間は罪の支配から解放され、神の支配下におかれたのです。神は、人間に、神の前に立つことのできる義をお与えになった。この神の与えてくださった義は、人間の新しい命そのものです。

聖書は、これら一連のことを「キリスト・イエスによる贖い（あがない）の業」と呼んでいます。「贖い」の、元の意味は、身代金です。身代金を払って、神は私どもを神の支配下へ買い戻してくださいました、贖ってくださいました。それがイエス・キリストの十字架の死の意味です。

もちろん、このことは、ただ神から出たもの、それゆえただ「神の恵み」によるものであり、「無償で」、何の対価も求めない、受け入れる者にそのまま与えられるものでありました。

3 応答としての信仰

さて残っているのは、このイエス・キリストの贖い、救いを、私どもどのように受け入れるか、救いにあずかるかという問題です。

それを取り上げる前に、こういったイエス・キリストによる救いを、現代のユダヤ教の人たちはどのように考えているのか、それを、一つだけ、ご紹介しておきたいと思えます。

二十世紀のユダヤ教の著名な人物であり、キリスト教とも積極的に対話した、シヤローム・ベン・コリーン(1913-99)という人が、こんなことを書いていたのを思い出します——ユダヤ人は、この世が、救われていないことを深く知っており、この救われていない現実の中に、どのような〈救いの飛び地〉も認めない。救われていない世界のただ中で、〈救われた魂〉といった概念は、ユダヤ人には根本的に無縁であつて、ありえないもの、そしてこの点に、ユダヤ人がイエスを排斥し、捨てた核心が存するのである、と。

これは、あるキリスト教の本を読んでいて出会った言葉ですが、現代のユダヤ人のものの見方、あるいは生き方を率直に言い表したものだと思います。しばしば私どもが耳にするのは、ユダヤ人は、救い主（メシア）がまだ来っていない、これから来られる、それを待ち望んでいるということです。

これは、言い方を変えれば、いまご紹介したようなベン・コリーンの認識になります。この世界はまだ救われていない、だから〈救いの飛び地〉など、そもそもないのだ、と。

けれども、どうなのでしょう。確かに、いま世界に起こっていること、戦争であ

り、病気の蔓延であり、痛ましい事件であり、災害であり、私も一人一人の苦しみや悩みは言うに及ばず、あれこれ考えて行くと、ベン・コーリンが言っていることは当たっているようにも思われてきます。つまり世界のどこにも「救いの飛び地」などはないのだと。私も、イエス・キリストの救いを信じながらも、彼のように考えるほうが現実合っている、例えばそのような思いにかられることがあっても不思議でないかも知れません。

しかし、そうではないのです。「救いの飛び地」はあるのです。私もイエス・キリストにおいて、ただこの方、イエス・キリストにおいて、神は確かに私どもに救いを与えてくださったのです。そのことを私ども、神の言葉としての聖書の証しによって信じ、宣べ伝えているのです。

さて、この救いを、私どもどのように受けとる、どのようにして救いにあずかるかという問題です。

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません（二一―二二節）。

二二節以下の段落、その言葉に戻ります。ここは、ローマ書だけでなく、新約聖書全体を通してのもっとも重要な箇所の一つです。

ここではしかし、ただ「信仰」という言葉に注意していただきたいと思えます。「イエス・キリストを信じることにより」とあり、「信じる者」すべてに与えられるとあります。

「信仰」ということについて、もちろん、いろんな説明ができると思えます。しかし一番大切なことは、信仰は、信じるその対象と共にある、対象によって引き起こされるものだ、ということです。

別の言い方をすれば、信じる対象から離れて、信仰そのものが、はじめから自分にあるのではないのです。信じる対象とはここではイエス・キリストです。この方から離れて、この方とは別のところに、信仰が、強かったり、弱かったりしてあるのではないのです。自分の心の状態のことではないのです。

その意味で、信仰は、応答です。イエス・キリストが、御霊をもって、働きかけてくださいます。イエス・キリストが、ある時は聖書の言葉を通して、ある時は友の言葉を通して、ある時は、私どもの人生の経験そのものを通して、私どもに語りかけてくださいます。場合によったら、それが、もう遠く過ぎ去った出来事であったかも知れません。あどとき、あの言葉、あの出会いを通して、神様は、イエス・キリストは私に語りかけてくださった。しばしば私も経験するように、振り返って分かんときがあるのです。

しかし確かに語りかけてくださった。自分の人生を横切って行った。それは小さなことであったかも知れない。しかしそのことを認め、受け入れ、感謝し、それを大切にして新たな人生を歩むこと、それが信仰なのです。

(二月二二日)